

称号及び氏名 博士（臨床福祉学） 稲森 里江子

学位記番号 甲第8号

学位授与日付 平成24年3月23日

学位申請論文名

『 社会福祉「援助技術」の医学教育への導入とその効果について
ーコミュニケーション・スキル教育の実証的研究ー 』

学位申請論文審査委員会

主査 教授 武田 建

副査 教授 浅野 仁

副査 教授 太田 義弘

1. 学位申請論文の内容要旨
2. 学位申請論文審査結果の要旨
3. 最終試験結果の要旨
4. 公聴会の日時
5. 審査委員会の所見

1. 学位申請論文の内容要旨

序論では、「傾聴」や「共感」などのコミュニケーション・スキルに関する学習指導が医学教育の一環として近年増加している背景を説明し、こうした社会福祉学の対人援助技術を医学教育に導入する目的と実証的方法、本論文の構成について述べている。

第1章では社会福祉学の対人援助実践モデルの発展および医学教育や医療現場における医療面接の位置づけを概観している。両者の共通点として、傾聴が出発点になること、また共通の課題としては、どちらも科学的根拠に基づく効果測定を行う必要があると述べている。

第2章では、傾聴していることを伝えるためのコミュニケーション・スキルを整理し、主要な傾聴要素とみなされている言語的・非言語的スキルを先行研究から抽出して、傾聴トレーニングの学習項目に取り上げたと述べている。

第3章では、傾聴トレーニング用プログラムの作成を説明し、学習効果を測定するための主観的指標および客観的指標について述べている。プログラムは行動学習理論およびロールプレイ(医療者役と患者役)を応用し、傾聴に必要な言語的、非言語的スキルを4Stepsや5Steps構成で段階的に学習するよう試みている。主観的指標には、話し手(患者役)の話しやすさ感について5件法評価を用い、客観的指標は、話し手(患者役)の発話中の動作頻度や音声周波数を計測している。さらに、トレーニング中の録画を直後に再生し、参加者の感想やスキル達成自己評価を求めたと述べている。

第4章では、4Steps版および5Steps版傾聴トレーニングの実践結果を報告している。話しやすさという主観的指標を分析した結果、Stepの進行につれて聴き手(医師役)の傾聴スキルが増えれば、それに伴って話し手(患者役)は話しやすいと感じるが、「ペン回し」などの不適切な動作を聴き手が追加すると、話しやすさは損なわれたと報告している。客観的指標の動作に関しては、話しやすさが増せば、話し手(患者役)自身が自分の話の区切りで相手を見てうなづくという一連の動作が増加すると報告している。音声については、200Hzおよび500Hz周辺の音声周波数パワーが大きいことから、これらの高さの音声話しやすさの指標になると示唆している。しかし、一概に話しやすさという主観的評価を反映するものではなく、条件設定や分析手法の面でさらなる検討が必要であると述べている。また、参加者の感想を整理し、医療面接に有用なトレーニング内容であると評価されたと報告している。さらに、18項目から成る菊池式社会的スキル尺度(KiSS-18)を用いて、傾聴トレーニング実施前後に学生の社会的スキル度の変化をみた結果、傾聴トレーニングという介入が社会的スキルの向上に有効であったことを横断的、縦断的比較をもとに報告している。

終章ではこれまでの章をまとめ、社会福祉学と医学教育の学際的发展によって、支援を求める人の最大幸福に貢献する方向性を考察し、実証研究の意義の再確認および患者のストレングスに働きかける新たなアプローチの可能性について展望している。

2. 学位申請論文審査結果の要旨

内容全体の評価について：

本論文は、社会福祉学の対人援助技術という方法を、医学生のコミュニケーション教育に導入した場合の効果について、主観的および客観的指標を用いて実証するという、臨床福祉学における学際的かつ萌芽的アプローチとして有意義な研究である。

論文構成について：

実証的研究として必要とされる要件を満たした構成となっている。

研究目的について：

社会福祉とりわけ「ケースワーク」が長年培ってきた「援助技術」の方法を医学生に教えることにより、彼らが将来医師として患者が語ることに耳を傾け、より良いコミュニケーションをとることが出来るような手法を提案することであり、臨床福祉学における実証的アプローチとして意義のある目的と言える。

先行研究について：

社会福祉学の対人援助実践モデルの発展および医学教育や医療現場における医療面接の位置づけを概観し、両者の共通点である傾聴に焦点を当て、実証的研究という共通の課題について考察を深めている。

論旨の展開について：

目的が明確に示され、傾聴スキルの抽出とそれらを効果的に学習する傾聴トレーニングの開発、および主観的、客観的指標を用いた効果測定を通して、傾聴トレーニングの学習効果が実証されていると評価できる。社会福祉学の対人援助技術を医学教育に導入する際の実践的アプローチとして資するものである。

研究結果について：

行動学習理論およびロールプレイ(医療者役と患者役)を応用した傾聴トレーニングを医学生に用いて、話しやすさや動作、音声、社会的スキル度という多面的指標をもとに、統計手法を厳密に適用して検討している。その結果、聴き手(医師役)の使う傾聴スキル数が増えると、話し手(患者役)は話しやすいと感じ、それに伴い話し手の特定の動作が増すことを観察している。さらに、傾聴トレーニングという介入が社会的スキルの向上に有効であり、その効果は累積することを横断的、縦断的比較から実証している。こうした介入を継続的に医学教育に導入する意義を明確に示す結果であると認められる。

今後の課題について：

社会福祉学と医学教育との学際的な相互作用や相乗効果は実証的なアプローチを通して可能になることを、両分野の新しいモデルを参考にしながら展望している。本研究の傾聴トレーニングはコミュニケーション・スキルの基礎的な要素に主眼を置いたものであるが、今後は患者のストレングスに働きかけるなどの新たなアプローチの可能性について更にプログラム内容を充実させ、応用範囲を広げていただきたい。

3. 最終試験結果の要旨

最終試験では、社会福祉学の対人援助技術という方法を、医学生のコミュニケーション教育に導入した場合の効果について、主観的および客観的指標を用いて実証した結果が適切に述べられ、今後の課題についても十分な考察が加えられていた。医学教育におけるコミュニケーション学習の指針を提供するとともに、臨床福祉学における実証的アプローチとして有意義な研究であると認められる。

4. 公聴会の日時

2012年 2月15日 10時

5. 審査委員会の所見

本審査委員会は、2011年12月20日に受理された学位申請論文申請者、学位申請論文について慎重に審査をし、2012年2月15日に開催された公聴会および口頭試問においてさらに審議をした結果、稲森里江子氏は博士（臨床福祉学）の学位を受けるに値すると判定いたしましたので、ここにご報告いたします。

以上